

大橋めぐみ作 「計画」

前編

- (効果音) (バス通りの雑踏)
- 石田香織 あーあ、始業式って、ほんとにいつも眠いよね。
- 友達 1 今日、特に長くなかった？ 校長先生の話。
- 友達 2 長かった！ もう足の裏が冷たくなっちゃったよ。
- 香織 勉強とか言って、来てない人いたよねえ。
- 友達 1 でも、どっちもどっちじゃん。
- 友達 2 うちの親が「けじめつけなさい」って無理やり出されたよ。
- 香織 言う言う。毎年ワンパターンの話、聞くだけなのに。
- 友達 1 バス来てるよ！ ダッシュ!!
- (効果音) (バスの発進音)
- 香織 はあー、間に合った。
- ナレーション(香織) わたし、石田香織。中学3年、つまり花の受験生。4月ともなれば、もう推薦で高校が決まっている子と、公立一本で勝負する子以外は、わたしも含めて“臨戦態勢”だ。わたしのあこがれは私立の青春高校。ここには普通科のほかに音楽科があって、将来音楽関係の仕事に就きたいと思っているわたしは、1年の時から決めていた。父さんや母さんは、普通の高校に行けばお金もかからないし、大学から専門の勉強をしてもいいじゃないかって言うけど、青春高校の音楽科はずっとわたしのあこがれだったのだ。あきらめるわけにはいかない。
- バスアナウンス 次は青葉台団地、青葉台団地。終点でございます。どなた様もお忘れ物のないようお支度願います。次は青葉台団地、終点でございます。(F/O)
- 香織 ただいま。
- 貴弘(弟) お姉ちゃん、お帰り。
- 聡(兄) おう、香織もラーメン食うか？ 一緒に作ってやるぞ。
- 香織 ラッキー。ねえねえ、郵便来てなかった？
- 聡 ああ、今朝の分はまとめてリビングのテーブルの上だ。
- 香織 サンキュ。お兄ちゃん。
- 聡 何かあるのか？
- 香織 (向こうで)ちよっとね。…あ、あった!(少し間)やったあ! (戻ってくる)ねえねえ、見て。1次の書類審査に通ったんだよ! うれしい!
- 貴弘 すごい! お姉ちゃん、合格?
- 香織 ううん、まだ筆記試験と面接まであるけど、でも第1関門突破!
- 聡 へえ。ひょっとして、書類審査って全員合格じゃないのか?

香織 あー、ひっどーい。それ、どういう意味よ。

聡 あれ？ 貴弘、何か聞こえたか？

貴弘 ううん、何も聞こえなかったよ。

香織 もう貴弘まで。でも今日だけ許す。へへへ。

ナレーション 聡お兄ちゃんは大学1年。甲府で下宿しているのだけど、今はお正月休みとか言いながら、後期試験まで実家に戻ってきている。弟の貴弘は小学6年。春から中学生だ。クラスの3分の1は同じ中学校へ上がるので、余りピンと来ないみたい。でも、日曜日に行ってる教会学校のお友達と中学で一緒になれるらしく、そのことはとても喜んでるようだ。

貴弘 でさ、今日の日曜日の午後は、教会学校の6年生は全員中学生の集会に招待されてるんだよ。それでね、中学生の人たちが人形劇とかやってくれるんだって。あと、アイスクリームも出るって言ってたよ。

聡 懐かしいなあ。おれも中学生の時行ったことあるけど、ずっと続いてるんだな。

貴弘 お姉ちゃんも中学生だから来ればいいのに。

香織 冗談でしょ。お姉ちゃんは受験生なの。

ナレーション そんな、冬休みの名残のような、ノンビリした一日で終わるはずだったのだけど
…。

(石田家、夜)

聡 ちょっと待ってよ、父さん。転勤って、今1月だよ。

父 父さんも驚いたよ。何でも、年末から入院していた大阪支店の支店長が、そのまま長期療養が必要とかで、急きょ支店長代理が必要になったんだ。普通は支店の中でだれかを昇格させるものなんだけど、うちは関西進出を始めて間もないからな。大阪支店も若いやつらばかりなんだ。…全く、人生何が起こるか分からんなあ。

貴弘 じゃ、うち、引っ越すの？

父 貴弘と香織は、卒業式まではお母さんと家に残りなさい。貴弘は向こうの中学へ入学手続きをしておくからな。香織もまだ2次募集には間に合うだろう。

香織 (かぶせて)やだ!

母 香織。

香織 やだよ！ わたし、絶対反対。青春高校へ行くんだから！ 父さんが単身赴任すればいいじゃん！ わたし、絶対大阪には行かないからね！

父 何年になるか分からんのだ。ここの団地だってタダじゃあない。聡もあと3年は仕送りが必要だし、いくら補助が出るといっても、このご時世にそう幾つも家を構えるわけにもいかん。

香り でも、やだ!

母 香織、青春高校だけが高校じゃないのよ。

香織 じゃあ母さんは大阪に行けば？ わたし、独り暮らしする。

父 ムチャを言うんじゃない。

聡 香織。お前が大学に入るころは、おれも働き始めるし、行きたい高校に行けるからさ。

香織 お兄ちゃんはいいいよ。好きな学校にいけるんだもん。わたしだって、わたしだって...(泣き出す)青春高校に行きたいよ!

聡 おれだって高校は地元の公立だったぞ。

母 香織、落ち着いて相談しましょう。

香織 もういい!! みんなは自分に関係ないから平気でそんなこと言えるんだよ。

(効果音) (香織、部屋に駆けていく。)

父 待ちなさい!

母 香織!

ナレーション まるでみんながわたしの邪魔をしているような気がして、とにかく悔しかった。あこがれの青春高校へ行けないかもしれない。その日から、わたしは勉強にも身が入らず、学校から帰ってもゴロゴロしているだけだった。隆弘もやっぱり元気がなかった。それでも、次の日曜日はまた教会学校へ出掛けていった。お友達に何て話すんだろう。そんなことを考えながら、わたしはベッドに寝転がってぼんやり天井を眺めていた。

香織(モノ) あれ? 雨?

(効果音) (ポツポツ雨から本降りに)

母 (階下から)香織、悪いんだけど隆弘に傘持っていってくれない? あの子、玄関に置きっ放しにしてっただよ。

ナレーション わたしは返事もせず立ち上がると、玄関にあった弟の傘と自分の傘を持ってドアを開けた。

香織(モノ) 寒い。

ナレーション 何だか、空にまでわたしの気持ちに移ったかのように、1月の雨はミズレ混じりだった。

後編

(効果音) (雨の音)

ナレーション わたしの名前は石田香織。中学3年生。いわゆる受験生だ。私立の青春高校音楽科にあこがれて、書類審査にパスしたというのに、父親の急な転勤の話。大学生のお兄ちゃんが下宿をしているので、わたしまで独り暮らしをする余裕はうちにはない。転勤先の大阪の高校へ行くように両親から言われたわたしは、すっかりやる気をなくして、家でゴロゴロしていた。次の日曜日、外は午後からミズレ混じりの雨だ。傘を持たずに教会へ出かけた弟の貴弘に傘を届けるため、

わたしは外に出た。

香織(モノ) えっと、何て言って呼び出してもらえばいいんだろ。それとも外で待ってたほうがいいのか。...でも寒い。

ナレーション 教会の大きなドアを少しだけ開けて、わたしはそっと中をうかがった。

広瀬千秋 (中から)あ、こんにちは。

香織 え？ あ、...こんにちは。

千秋 集会に来はったんやろ？

香織 あ、いえ、あの、弟に傘を持ってきてただけなんです。あの...石田貴弘は...

千秋 あ、タカ君のお姉さんか。わたし、中学生会の広瀬千秋です。

香織 貴弘の姉の香織です。

千秋 とにかく入って。外、寒いし。

香織 あ、ど、どうもありがとう。

千秋 今、ちょうど人形劇始まったところやわ。香織ちゃんは知らんと思うけど、聖書に出てくる、ずうっと昔の「ナアマン將軍」ていう人の話やねん。中学生会のみんなとスタッフがやってるんだけど、せっかくやから座って見ていって。今、あったかい紅茶持ってくるわ。

ナレーション 気がつくとも随分体が冷えていた。紅茶を飲みながら、わたしはほっと息をつき、みんなの後ろからぼんやりと人形劇を眺めていた。貴弘は最前列の一番左端ひだりはしで見ている。

劇ナレーター そこでナアマン將軍は、病気を治してくれるかもしれないというエリシャという先生に会いに、贈り物をたくさん持って出かけていきました。エリシャ先生の家に着くと、先生の召し使いが出てきて、ナアマン將軍にこう言いました。

召し使い エリシャ先生はこうおっしゃいました。「ヨルダン川へ行行って、体を7回洗いなさい。そうすれば治ります。」

ナレーター すると、ナアマン將軍はカンカンに怒りました。

ナアマン 何だと？ わたしはてっきりエリシャ先生が自分で出てきて、わたしの上で手を動かして、病気を治してくれるよう神様にお願いしてくれと思っていたのに。

ナレーター すると家来の一人が、帰ろうとするナアマン將軍に言いました。

家来 ナアマン將軍。もしエリシャ先生がもっと難しいことを言われたら、あなたはそれとおりになされたでしょう。なのに、どうして今言われた簡単なことはできないのですか？

ナアマン なるほど。それはもっともだ。では言われたとおりにやってみるとしよう。

ナレーター ナアマン將軍は、エリシャ先生の言われたとおりにヨルダン川という川で、体を7回洗いました。すると、どうでしょう。

ナアマン おお、本当に病気が治ったぞ！ エリシャ先生の信じている神様だけが、本当の神様だ。

ナレーター ナアマン将軍は、大喜びで、お礼を言うためにエリシャ先生のところへ戻っていききました。そして、本当の神様を心から信じることができました。さて皆さん、もしナアマン将軍が、自分の思っていたとおりじゃないからといって、体を洗わなかったら、病気は治ったと思いますか？ 神様は時々、わたしたちが考えてるのは全然違うやり方でこたえてくださることがあります。思いどおりのやり方じゃないかもしれないけれど、一番いいことをして下さいます。

ナレーション 今まで聞いたこともない、変わった話だったけど、自分の思っていたことと全然違うことを言われて、カンカンに怒ったナアマン将軍という人と、違う学校へ行くように言われて怒っているわたしと、ちょっと似てると思った。ナアマンさんは病気を治してもらったからいいけど、このままだと、わたしは一体どうなるんだろう。

千秋 香織ちゃん、どうやった？ 子供向けやったからつまらなかった？

香織 ううん、そんなことないよ。でも、神様がいつも一番いいことをして下さるなんて、どうして言えるの？ 神様は、だれのことでもちゃんと考えてくれるの？

千秋 そやなあ。わたしの場合やけどな。小学校3年の時に大阪から転校してきて、最初のころは、よういじめられとってん。何でかしらんけど、「何でわたしがこんな目に遭うのん？ 神様、ひどいやんか」って言うたこともあるよ。親はよく「相手の子を責めてばかりいないで、自分の公同も反省しなさい」って言うてたけど、わたしはとにかく相手の子のほうが悪いて思ってたから、そんなことできへんかった。ある時、いじめられてワンワン泣いてた時に、お母さんが教えてくれた聖書の箇所があるんや。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」(ヘブル13:5)っていう神様の約束なんやけどな。「決して離れない」って言葉信じて、いつもいじめてくる子に、勇気出して自分から明るく話し掛けていったんよ。めっちゃめっちゃ緊張したわ。その子も最初すごい変な顔してたけど、ちょっとずつ普通に話せるようになってきてん。

香織 偉いなあ。そんなことができたんだ。

千秋 全然偉くないって。でも後で聞いたら、だれとも話そうとせえへんわたしの態度が、すごい生意気に見えてんて。もしわたしが、いつまでも「相手が悪い!」ってきめつけて自分から話しかけへんかったら、ずっと悪い関係のままやったと思うし、やっぱりわたしもナアマン将軍やったわ。でもその時に、もしわたしが神様を信じて一緒に歩いてたら、神様はわたしのことをちゃんと守ってくださって、わたしにとって一番いいことをして下さるんやって確信したわ。

ナレーション 一言一言、しっかりと話す彼女の言葉に、何だかとても励まされてる気がした。わたしも彼女みたいに確信を持って歩きたいと心から思った。

香織 ね、神様は、わたしなんかでも守ってくれる？

千秋 もちろんや。

ナレーション 彼女は、その部屋の一番奥の壁を指差した。木でできた十字架と、大きな紙に書かれた聖書の言葉らしいものが掛けてある。

千秋 あれ、見たことあるやろ。

香織 うん、十字架でしょ。弟が、あれにイエス・キリストっていう人が付けられてる絵を持って帰ってきたことがあるよ。

千秋 あれはな、わたしたちみんなのために、ああなったんや。

香織 わたしたち、みんな？

千秋 うん。人間ってな、みんな生まれつき人を憎んだり、バカにしたりする心を持ってたり、だれも教えてへんのにウソがつけたりするやろ。そういうのを罪って呼んでるんやけど、ほうっておいたら、わたしたちみんながその罪に対する罰を受けんとあかんねん。でも神様は、人間がその罰を受けなくても済むように、代わりに自分の子供...これがイエス様なんやけど、そのイエス様に罰を与えたんや。それが、あの十字架と、ほら、隣の紙に書いてある言葉や。読んでみて。

香織 「神は、実に、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠の命を持つためである。」(ヨハネ 3:16)

千秋 つまり、香織ちゃんのことも、それくらい愛して下さってるんや。

香織 え、わたしのことも？

千秋 そうや。

香織 そっか... だから、いつも一番いいことをしてくださってるって信じられるんだね。

千秋 うん。

ナレーション 何だか心がすっきりしてきた。青春高校へ入ることだけが、自分のすべてのように思い込んでイライラしていたのが不思議なくらい、穏やかな気持ちだ。この方が本当の神様なら、たとえ青春高校でなくても、きっとすばらしい道を教えてくださる。それが何か、今は分からなくても、神様のしてくださることなら、それがきっと一番なんだ。

貴弘 あれ、お姉ちゃん、来てたの？

ナレーション 貴弘が、バニラアイスクリームの入ったお皿を持って歩いてきた。

香織(モノ) あれ、貴弘もなんか元気が出たみたい。そっか、何があったか分かんないけど、やっぱり神様が元気付けてくださったんだね。

香織 傘持ってきてあげたの。お礼に、お姉ちゃんにもアイスクリームちょうだい。

千秋 タカ君、千秋ちゃんにも持ってきて。

貴弘 えー、ちょっと待ってよー。

香織、千秋 (笑い)

香織(モノ) よーし。明日からまた頑張るぞ。神様、どうか一緒にいてください。

ナレーション 知らないうちに心でそう祈りながら、外に出た。雨はもうやんでいた。わたしは、来た時とは別人のような、晴れ晴れとした気持ちで、冬の空を見上げた。

(完)